

フークトーフ通信 70

日銀福島支店前をSLが黒煙上げて

菅野俊之(福島市)



福島市本町通日本銀行支店前

皓星社発売『近代出版研究』5号がエフェメラ特集だ。古書日月堂佐藤真砂へのインタビュー記事やエログロ資料研究家大尾侑子たちの論考など、斯界のコレクターの熱気溢れる内容で興味津々。パンフレットやチラシ、絵葉書などの紙もの(エフェメラ)は拙宅

のポチ文庫でも蒐めている。たまさか、福島市本町の旧日本銀行福島支店前を黒煙上げて走る軽便蒸気機関車の古い絵葉書【写真参照】を入手したので、『フークトーフ通信』前号の荒川瑛楠さんの寄稿を受け継ぎ、往時の街並みを偲んでみる。この絵葉書は大正後期に作成。右側手前の典雅な洋風建築が旧日銀福島支店。道路の真ん中に敷設された線路を悠然と走行する黒いSL。左側に古風な吉田足袋店の建物が見え、それらの組み合わせが何だか、つげ義春

「ねじ式」の異空間みたいでシュールだ。

商業施設福島ビルディングの近くにあった旧日銀支店は、大正二年(一九一三)の竣工で、設計は日本近代建築の父と尊称される辰野金吾が中心となって担当。ルネサンス様式の赤茶けたレンガ造りの格調高い外観、内部の営業フロアは吹き抜けとなっており、天井には豪華なシヤンデリアが輝いていた。レンガは郊外の庭坂に専用工場を設け、特別に焼いたものと伝えられている。堅固な大金庫は、大盗賊でも金庫破りに十年かかると巷の噂となった。昭和五十五年(一九八〇)に現在の新店舗へ建て替えられるまで、本県金融界のシンボリックな建築であった。

福島駅前を起点とした小型蒸気機関車による路面鉄道は明治四十一年(一九〇八)に開通。次第に路線を広げて福島市と信達地方各地を結び、物資運送だけでなく客車便も増えていった。機関車は無煙炭とコークスを使う規則だったが、経費節減のためか粗悪な石炭を焚き黒煙を吐いて走行するようになり、市街地住民から苦情が出たという。大正十一年(一九二二)、信夫郡鎌田村本内(現福島市)で軽便煙突から出た火の粉が原因で大火災が発生。四年後には一気に電化が進み、SLは電車に交代を余儀なくされた。その路面電車も地域住民の足として長年に亘って親しまれたが、昭和四十六年(一九七一)に惜しまれつつ廃止された。

福島駅から東へ延びた繁華街を走行するSLの絵葉書は、これまで五点ほど確認しているが、いずれも興趣に富む。古ぼけた絵葉書が喚起する昔日の街並みの懐かしい騒めき。これからもエフェメラのコレクションに鋭意努め、それらを活用しながら楽しく歴史探訪を続ける所存である。